

## 平成 26 年度 学校経営計画及び学校評価

## 1 めざす学校像

個々の生徒が、本校での全ての教育活動に対し、挑戦するとともに充足感を得る教育をめざす。

1. 生徒に学ぶことの意義を理解させ、一人ひとりの希望進路を実現できる学校
  2. 本校での生活を通して、常識と良識を備えた人格の形成を図るとともに、生徒が社会と関わり、貢献できる力を育む学校
  3. 中学生から「行きたい学校」、保護者から「行かせたい学校」として選択され、入学後に満足感を与え、卒業時に来て良かったと思える学校
- (本校は EIE 'Evidence-informed Education' をめざします)

## 2 中期的目標

## 1 教育力の向上

## (1) 確かな学力の育成

ア 授業充実PTを核に、前年度のパッケージ研修で確認した本校のめざす授業「興味関心をかきたてられる授業、わかる授業」を実施する。

※生徒向け学校教育自己診断における授業満足度を平成 26 年度末に 80%以上(H25 で 79%)とし、それ以上の水準を保つ。

イ 基礎基本の力をつけるための 10 分間の朝学習(山田 BT)を H26 年度に開始する。H28 年度末までの 3 年間で、内容を検討し中期目標完成年(平成 28 年)に実施内容を確認する。※年度末の授業アンケートで山田 BT での「知識や技能が身についた」項目の平均 3.0 をめざす。最終年度には 3.2 とする。

ウ 家庭学習時間を増加するために、反転学習など新たな授業の試みを行う。

※2 年次の夏の学力生活実態調査において、平日ほとんど学習しない生徒の割合(H25 50%)を毎年 10%ずつ削減する。

エ 国公立から難関私立大学への大学進学を中心とする生徒・保護者の進路希望に対応する。

※前年目標を踏襲し、平成 27 年度にはセンター試験受験者を 150 人以上(H25 人)、国公立大学合格者 10 人以上、難関私立大学合格者 100 人以上とする。

※全国レベルで生徒の学力を診断できる実力考査を年に 1 度以上実施する。

## (2) グローバル人材の育成

ア 語学研修を引き続き実施するとともに、姉妹校提携も推進し、英語を用いたコミュニケーション力を育成する。

イ 「学びの共同体」について研究、試行実施を行い、本校生徒のキャリアにもつながる「社会の中で自分の役割を果たす」力を育成する。

## (3) 授業の質の向上：全体を通じ若手教員の育成を図る

ア 授業アンケート(7 月・12 月)の一回目を課題把握、二回目を成果検証と位置づけ、授業改善を推進する。

イ 「全員による全員の授業観察」を目標にし、パッケージ研修を継続するとともに、公開授業、授業研究を進める。

※他の教諭の授業観察を行った教諭の割合を 100%。研究授業・公開授業の実施回数を年間 3 回以上とする。

ウ ICTを活用した授業の研究を進める。

## (4) 教育活動の情報発信

ア HP を作り直す。外部から見てもらいやすく、教育活動を十分発信できるものにする。

※長期休暇中を除く週 1 度以上の更新、学校教育自己診断における「学校のHPをよく見る」の項目の肯定的意見を 50%以上とする(H25 29.3%)

イ 平成 25 年度に設置した広報委員会活動の充実を図り、分掌化も視野に入れる

## 2 豊かでたくましい人間性のはぐくみ

## (1) キャリア教育を根幹に据えた学校づくり

ア 学校全体の取り組みを「キャリア教育」を中心に据えたものに変革する。

※キャリア教育の視点を軸に据えた学校全体のグランドデザインを平成 26 年度から平成 28 年度にかけ完成する。

イ 一方、卒業生の実態把握を進め、同窓会とも連携したキャリア教育を実施する。

## (2) 部活動や特別活動を通じ、生徒の「自尊感情」を高め他者の役に立っていると感じられ、困難を乗り越えることのできる力を育成する。

ア 部活動加入率を中期目標完成年に 90%とし、それを維持する。(H25 87%)

イ 特別活動について連携大学(関西学院大学、東京大学)との研究を継続する。

ウ 学校協議会からの意見に基づき、家庭学習と部活との両立を図る。

※学力生活実態調査における「部活動で疲れ自宅での学習に集中できない」「部活動を優先し学習時間が確保できない」とする者を中期完成年度(H28)には平成 25 年度の半数まで削減する。(H25 割合合計約 60%)

## (3) 情報リテラシーの育成：情報モラルの育成に努める。

## (4) いじめの防止：いじめ防止対策推進法の制定に伴い、学校としていじめを許さない体制をとる。

## 3 学校の組織力向上と開かれた学校づくり

## (1) 組織力向上：生徒にとって必要なことを迅速に判断し、実施していけるような校内組織への改編を図る。それに伴い校務を担うミドルリーダーの育成を図る。

## (2) 保護者・地域との連携

ア 小学生対象の科学入門講座、中学生対象の「楽しいスポーツ芸術講座」、山高杯、山高カップなどを維持発展させる。

イ 地域の行事への積極的に参加する。

また地域人材の活用について、地域と協議を開始する。

## (3) 学校における ICT 活用の推進

ア ICTを活用して校務の効率化を図り、教職員が生徒と向き合う時間を確保する。

## (4) 個人情報の適切な管理：行内の情報管理の体制づくりを行うとともに教職員の意識を高める。

## 4 安全で安心な学びの場づくり

## (1) 生徒支援の充実：定期的にアンケート調査を実施し、生徒の状況把握に努めるとともに、「高校生活支援カード」を利用した支援の充実を図る。

## 【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 26 年 12 月実施分]	学校協議会からの意見
(生徒) 学校生活については昨年に引き続き大半が肯定的な回答をしている。一方で、授業への満足度が 72%と昨年より 5 ポイント下がっている。ICT の活用も含め、授業方法の改善が道半ばである。(保護者) 寄せられた回答は、おおむね良好とするものであった。今後も本校の教育活動を理解していただく努力を行っていく。(教職員) 授業や生徒指導について互いに十分に話し合える環境づくりを進めていく必要がある。	第一回(6/5)・互いの授業を見学するのはとても良いことだと思う。 ・一人の人間としての生涯教育という観点から、教科の学習をはじめ、将来の自分の生き方・あり方を考え、自分で選択できるような力をつけて欲しい。 第二回(11/20)・授業の効率化と、授業力の向上をお願いしたい。ICT の活用を推進。 第三回(1/15)・若い人の自立を如何にさせるか。大学でも課題である。

## 3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 教育力の向上	(1) 確かな学力の育成	ア 授業充実PTを核に、前年度のパッケージ研修で確認した本校のめざす授業「興味関心をかきたてられる授業、わかる授業」を実施する。	ア 生徒向け学校教育自己診断における授業満足度を80%以上とする。	ア 本年も授業充実PTを核に授業研究に取り組んだ。理科などで興味関心の深まりや知識技能の習得でのプラスが見られたが、本校職員による不祥事の影響による保健体育科の満足度の落ち込みなどにより、授業満足度は70%にとどまった。次年度は、今年度理科などで取り組んだ新たな授業の試み等の拡大をめざし、校内研修等も活用しながら授業内容の研究・改善に取り組みたい。(△)
		イ 基礎基本の力をつけるための10分間の朝学習(山田BT)をH26年度に開始する。	イ 年度末の授業アンケートで山田BTについて「知識や技能が身についた」項目の平均3.0をめざす。	イ 全学年で毎日10分間の朝学習(BT)を始めた。しかしBTの評価項目平均は2.5であった。次年度はさらに生徒が「学力がついた」と感じられるような取組みをめざしたい。(○)
		ウ 家庭学習時間を増加するために、反転学習など新たな授業の試みを行う。	ウ 夏の学力生活実態調査において、平日ほとんど学習しない生徒の割合を40%以下とする。	ウ 反転学習も理科などで取組みを開始した。平日ほとんど学習しない生徒の割合は1,2年で45%と、前年度-5%は達成した。「自ら学ぶ」ことができるように、一層の研究・改善に取り組みたい。(○)
	(2) 授業の質の向上	エ 国公立、難関私立大学への進学を中心とする生徒・保護者の進路希望に対応する。	エ 国公立5人以上、難関私学合格者80人以上をめざす。	エ 国公立7人、難関私学(関関同立)107人となり、難関大学合格者は目標を大きく上回った(◎)。引き続き3月末まで指導を継続する。
		ア 「全員による全員の授業観察」を目標にする。また、研究授業、公開授業を積極的に実施する。	ア 他の教諭の授業観察を行った教諭の割合を100%とする。研究授業・公開授業を年に3回以上実施する。	ア 研究授業、公開授業はのべ38回実施し、また、全教職員の授業公開を行った。他の教諭の授業観察の割合は、93%であった。次年度も教科を中心として粘り強く取り組みたい。(○)
		イ ICTを活用した授業の実践を行う。 ・ 生徒の情報関連機器の所有率など、今後の授業展開の基礎となるデータを集める。	イ ICTを利用した公開授業を年1回以上行う。 ・ アンケートを利用し、生徒の持つ情報関連機器の調査を年一度以上行う。	イ ICTを活用した反転学習公開授業、授業内でのICT活用公開授業など、6回の公開を行った。また生徒のスマホ保有率が90%以上であることがわかった。生徒の持つ機器の効果的な活用法なども今後検討していく。(◎)
(3) 教育活動の情報発信	ア HPを作り直し、外部から見てもらいやすく、教育活動を十分発信できるものとする。	ア ・ HPの刷新。長期休暇中を除く、週1度以上の更新。 ・ 学校教育自己診断の「学校のHPをよく見る」の項目の肯定評価を40%以上とする。	ア HPを刷新した。その後週一度以上の更新を行っている。ただし学校のHPをよく見るとしたものは23.7%にとどまった。HPそのものを生徒にとって「見なければならぬ」ものとするのか、生徒への連絡は前項の機器利用なども含め別の方法がいいのかを次年度検討する。(○)	
	イ 広報委員会の充実を図る。	イ ・ 学校説明会を年間30回以上実施する。  ・ 合格者のいる全中学校を訪問する。	イ 学校説明会は、計34回実施した。中学生の参加は多いが、繰り返しとなる回も多く、次年度はより精選する予定である。(◎)  ・ 合格者のいる全中学校を訪問した。さらに説明会など複数回訪問した学校もある。次年度も同様に取り組む。(◎)	

## 府立山田高等学校

2 豊かでたくましい人間性のほぐみ	<p>(1) キャリア教育を根幹に据える取り組み</p> <p>(2) 部活動や特別活動を通じてのたくましい人間性を育てる</p> <p>(3) 情報リテラシーの向上</p> <p>(4) いじめ対策</p>	<p>ア 同窓会と協力し、卒業生のキャリア実態を把握する。またそれを活用し、在校生のキャリア教育に生かす。</p> <p>ア 部活動への積極的な参加を促す</p> <p>イ 特別活動などについての連携大学（関西学院大学・東京大学）との研究を継続し、校内での報告会を行う。</p> <p>ウ 生徒会の、部活動に関する規約などを徹底し、家庭学習と部活動の両立をはかる。</p> <p>エ 2年間を通じて成果の上がってきた遅刻指導を徹底する。</p> <p>オ 規範意識についても、高い水準を保つ。</p> <p>ア 現在に生きる生徒として、情報リテラシーの向上を図る</p> <p>ア 相談体制の充実を図る。</p>	<p>ア ・卒業生のキャリア実態把握の方法を研究する</p> <p>・同窓生によるキャリア教育の機会を年1回以上をめぐりに持つ。</p> <p>・</p> <p>ア 部加入率90%をめざす。</p> <p>イ 研究成果の公表、途中経過の報告会を年度内に各1度以上行う。</p> <p>ウ 学力生活実態調査における、部活動が学習に悪影響を与えているとするものの割合(H25 60%)を、前年比-10%とする。</p> <p>エ 平成25年度比-10%を達成する。</p> <p>オ 学校教育自己診断において、「指示を守っている」とする者の割合90%以上。</p> <p>ア 研修会(生徒参加型)を年1度以上実施する。</p> <p>ア 気楽に相談できる先生がいるとする生徒の割合70%以上(H25 65%)</p>	<p>ア 同窓会とキャリア実態把握について協議を始めた。また、同窓生ではないが新聞にも取り上げられた「起業家」による講演会、外務省職員による国際交流講演会など、生徒のキャリアにつながる学習を2回以上実施した。(○)</p> <p>ア 部加入率は90.4%であった。次年度も引き続き同レベルをめざす。(○)</p> <p>イ 関西学院大学との研究継続を行っている。報告会もデータがまとまり次第行う予定である。ただし、東大との連携はアンケートの項目内容等一致できず、中止した。(○)</p> <p>ウ 困難な課題であり、H25年度よりも5%上昇している。内容は「部活優先なので勉強できない」とするものが31.7%、「部活で疲れて勉強できない」とするものが36.5%。学年が上がると、「疲れて」の割合が10ポイント減り、「部活優先」の割合が5ポイント増えるなどの特徴があるが、学校全体で部活動を学習しない言い訳にしない取り組みをする。(△)</p> <p>エ 指導の効果が十分に上がり、前年度比-33.3%を達成した。(◎)</p> <p>オ 前項目と同様生徒の規範意識も91.3%に達し、高い水準を保っている。次年度以降も同様の指導を継続する。(◎)</p> <p>ア 情報科で研修を行った。(○)</p> <p>ア 「気楽に相談できる先生がいる」という生徒は前年度から大きく減り、47.1%である。特に一年生で35%と低く、学年が上がるにつれて三年生で62.6%と増加する傾向がある。一方で、アンケートへの記入は増加しており、「先生に話しかける」よりも「書く」などの方が生徒が相談しやすいのかもしれない。次年度以降は多チャンネルでの相談の窓口の設置について検討する。(△)</p>
3 学校の組織力向上と開かれた学校づくり	<p>(1) 保護者・地域との連携</p>	<p>ア 高い評価を得ている小学生対象科学入門講座、中学生対象「楽しいスポーツ芸術講座」を維持発展させる。</p> <p>イ 地域との連携を深める</p> <p>ウ 地元公民館との連携行事を企画する</p>	<p>ア 小学生講座40名以上、中学生講座300名以上の参加をめざす。</p> <p>イ 地域協議会等へ10回以上参加する。</p> <p>ウ 連携行事年1回以上実施</p>	<p>ア 夏季の小学生講座は2校42名、中学生講座は380名であり目標を上回った。本校生徒も教える側として積極的に参加し、有意義な講座となっている。(◎)</p> <p>イ 地域協議会、フェスティバル準備等に計12回参加した。(○)</p> <p>ウ 地元公民館と連携し、戦前の茨木弾薬庫講演会の企画に参加した。(○)</p>